

心をつなぐ不思議な「お金」



エコマネー 鶴岡エコマネー研究会 仲川 昌夫

鶴岡エコマネー研究会は、八月初旬から鶴岡エコマネー」の運用を開始しようと、現在準備を進めています。なぜ、今「エコマネー」なのか…。

私たちの生活は、戦後まもなくに比べて、便利で裕福になったような気はします。しかし、みんな本当に幸せを実感しているんでしょうか。

錯覚ではありますが、金さえあれば何でもできるという貨幣経済にとっぴりとつかり、ぎすぎすした生活をしている中で、「幸福感」を実感できないでいる人が多いのではないかと考えています。そこで、貨幣経済とは全く価値観が違う、エコマネーを運用することによって、「幸福感」を実感しようということなのです。

それでは、そのエコマネーとはどんな仕組みなのか。

加藤敏春さん（経済産業省関東経済産業局総務企画部長）が提唱している、お金では評価できない、さまざまな日常的サービスを評

価し、そのサービスを交換する、道具として使う通貨の仕組みです。

エコは、エコロジー（環境）、エコノミー（経済）、コミュニケーション（地域）からなる造語で、マネーはお金。特徴は、流通している現金（円）とは交換できないことです。具体的な使われ方は、参加者それぞれが、「できること」と「してもらいたいこと」を登録し、「してもらった時」に、発行されたエコマネーを、ありがたうの気持ちとして支払う仕組みです。たとえば、「草むしり、買い物代行、犬の散歩、昔話をする、話し相手になる」などを交換することによって、地域の中で失われつつある、「人と人とのコミュニケーション」の輪を広げることが出来ます。そして、世代を超えた交流が生まれます。また、自分の存在価値が認識できるため、生きがいを感じ、さまざまな市民活動が創出され、自然と共生する生活が出来ます。

エコマネーは、現金では表せない「感謝の気持ち」を表すために使いますから、ためて

おいても利子はずきません。経済と同様に、活発に流通しないと停滞してしまいます。それを防ぐためという見地もあって、一定期間が経過すると振り出しに戻るのが通例になっています。

私は、慶應義塾大学鶴岡タウンキャンパスの開設を契機として、鶴岡市民が地域振興策を研究してきた「TTCCK構想地域振興調査ワークショップ」に参加してきました。その中で、座長の慶應義塾大学妹尾助教から、世界や日本の各地で地域通貨が流通しているとの情報提供がありました。地域通貨のエコマネーが、私の考えている市民活動に有効に使えるシステムと考え、TTCCKワークショップの研究テーマとするよう提案しました。この提案が受け入れられ、昨年（平成十二年度）一年間、七人のメンバーで地域通貨の研究をしてきました。最初は、「地域通貨って何」ということで、NHKが制作した地域通貨の番組をみんなで見ながら、ワイワイガヤガヤ。その後十数回のワークショップを開

エコマばあさんとステキな仲間の
エコマネーものがたり



催す中で、鶴岡の地域通貨はエコマネーでいく、換金性は持たせない、との基本的なことを決定しました（ハイヤーが利用できるなど、一部換金性を持つ地域通貨もある）。

いかに多くの市民からエコマネーを理解し、参加してもらえるかを論議する中から、「人の心と心をつなぐ不思議なお金エコマネー」というキャッチフレーズや、みんなに分かりやすく説明するために作成した「エコマばあさん」の物語も生まれました。

庄内市民活動センターで活動する中で、平成十三年二月に開催された、「全国ボランティア研究集会佐賀集会」（日本青年奉仕協会等主催）に参加してきました（全国から約千三百人が参加）。この研究集会で、私は「地域通

貨」の分科会に出席しましたが、全国のボランティアの中でも、地域通貨の位置付けが大きくなっていると実感しました。この全国集會が、平成十五年二月に庄内で開催されますが、そのときには、鶴岡のエコマネーが活発に流通していればと思っています。

地域通貨の研究と平行して、庄内市民活動センターでは、市民にエコマネーを知ってもらうため、平成十一年十一月にエコマネーネットワークの中山事務局長の講演会、平成十三年二月には、提唱者である加藤敏春さんの講演会を開催してきました。そして四月、エコマネー運用に向けて、「鶴岡エコマネー研究会」を立ち上げました。庄内市民活動センターがエコマネー運営事務局になっています。

行政主導の社会システムの枠を超えて、市民が自立する、新しい意識が生まれつつある今、市民活動センターの果たす役割は大きいと考えています。まちづくりや地域活動への、市民の参加・参画が一層重要な意味をなしていきます。現在、NPO法人を申請中ですが、エコマネーの運用によって、市民活動センターの基礎的な部分が構築され、より活発な活動ができていくのだと考えています。



提唱者の加藤敏春さんが、講演の中で「エコマネー成功の一つの要因は行政の陰からの協力」だと述べていました。

鶴岡市の場合、富塚市長がエコマネーに理解があり、「コミュニティの再生」を強く示唆もしています。市役所内部でも理解が進んでいると感じています。現在、鶴岡エコマネー研究会には、何人かの市役所職員が手弁当で参加しています。

これからの市民活動は、民間だけでなく、行政や大学等とも対等なパートナーシップを組んで活動していくことが、「コミュニティ再生」のカギと思っています。これからは、エコマネーについても、慶應義塾大学とも協力して、よりよいシステムにしていきたいと思っています。

私は、鶴岡市のいくつかの検討委員会や、懇談会に参加してきましたが、自分のまちは自分で作るという市民の意識がなくては、本当の自分たちのまちにはならないのだと思います。また、これからは、すべて行政に頼っていくことは経済的にも不可能になります。今地方自治では、自立した市民、自立した福祉が求められています。そのことを目指すのが、庄内市民活動センターであり、鶴岡エコマネー研究会だと思っています。八月初旬に運用開始する「鶴岡エコマネー」が、活発に流通し、コミュニティが活性化され、住民一人ひとりが生き生きとし、鶴岡が住みよい町になることを願って、今後とも活動をしていきたいと思っています。

仲川 昌夫

1952年、吹浦生まれ。鶴岡市大宝寺町11-11。鶴岡エコマネー研究会代表、庄内市民活動センター代表、プレススタッフ(株)代表取締役。

1984年建築設計事務所開設、1991年プレススタッフ(株)設立。

庄内市民活動センターは、
〒997-8585 鶴岡市馬場町11-63
TEL・FAX 0235-29-8291
E-mail: tsuruoka@yamagata-npo.ne.jp